

■帝王賞 (JpnI) アラカルト (過去全 43 回の分析)

※第 1 回 (昭和 53 年) から第 8 回 (昭和 60 年) までは大井ダ 2,800m で実施

※第 9 回 (昭和 61 年) からは中央競馬招待競走として実施

※第 18 回 (平成 7 年) からは指定交流競走として実施

※第 20 回 (平成 9 年) からはダートグレード競走として実施

※第 15 回 (平成 4 年) は 2 頭が 1 着同着だったため、優勝馬は 44 頭、2 着馬は 42 頭

※第 9 回 (昭和 61 年) は 2 頭が 3 着同着だったため、3 着馬は 44 頭

※記録は令和 3 年 6 月 16 日時点

■1 番人気馬と 2 番人気馬の差に注目

単勝 1 番人気馬は 13 勝、2 着 12 回、3 着 5 回で、3 着内率が 69.8%、単勝 2 番人気馬は 9 勝、2 着 6 回、3 着 2 回で、3 着内率が 39.5%、単勝 3 番人気馬は 7 勝、2 着 7 回、3 着 8 回で、3 着内率が 51.2% となっている。単勝 1 番人気馬と単勝 2 番人気馬の 3 着内率差が大きい点に注意すべきかもしれない。

■人気馬が上位を占めた例は少ない

過去 43 回のうち 29 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を収めている。なお、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は第 34 回 (平成 23 年)、第 35 回 (平成 24 年)、第 43 回 (令和 2 年) の 3 回だけである。

■“連覇”を果たした馬は未だゼロ

帝王賞において 2 回以上の優勝経験があるのは、第 11 回 (昭和 63 年) と第 14 回 (平成 3 年) を制したチャンピオンスター、第 31 回 (平成 20 年) と第 33 回 (平成 22 年) を制したフリオーソ、第 36 回 (平成 25 年) と第 38 回 (平成 27 年) を制したホッコータルマエだけで、2 年連続の優勝を果たした馬はまだいない。なお、フリオーソは第 32 回 (平成 21 年) で 2 着となっており、3 年連続の連覇は達成している。

■ 牝馬は4勝、外国産馬は優勝例なし

牝馬の優勝例は、第5回（昭和57年）のコーナンルビー、第19回（平成8年）のホクトベガ、第23回（平成12年）のファストフレンド、第26回（平成15年）のネームヴァリューと、これまでに4例ある。なお、外国産馬は第21回（平成10年）でバトルラインが、第23回（平成12年）でドーラルアラビアンが2着となったものの、まだ優勝馬はいない。

■ 4～6歳の馬が中心

馬齢別の勝利数を見ると、4歳が13勝、5歳が13勝、6歳が12勝、7歳が5勝、8歳が1勝となっている。馬齢が7歳以上だったにもかかわらず優勝を果たしたのは、現在のところ第37回（平成26年）のワンダーアキュートが最後である。

■ JRA勢が一步リード

中央競馬招待競走となった第9回（昭和61年）以降の計35回に限ると、地方所属馬は14勝、2着11回、3着18回、JRA所属馬は22勝、2着23回、3着18回となっている。3着以内馬延べ106頭に対する割合で示すと、地方所属馬は40.6%、JRA所属馬は59.4%だ。

■ 騎手別の歴代最多勝記録は「5」

騎手別の勝利数を見ると、5勝の武豊騎手が単独トップ。高橋三郎騎手、的場文男騎手が3勝で2位タイとなっている。

■ 調教師別の歴代最多勝記録は「4」

調教師別の勝利数を見ると、4勝の川島正行調教師が単独トップ。秋谷元次調教師、朝倉文四郎調教師、西浦勝一調教師、松田博資調教師が2勝で2位タイとなっている。

■ 8枠が健闘しているものの15～16番は優勝なし

枠番別勝利数を見ると、3枠（9勝）が単独トップ。8枠（8勝）が単独2位、6枠（7勝）が単独3位となっている。また、馬番別勝利数を見ると、1番、3番、4番、6番（各5勝）がトップタイ。8番、10番（各4勝）が5位タイだ。ちなみに、優勝馬が出ていない馬番は15番、16番のみである。